

授業力向上推進プロジェクト委員会

所属： 益田清風高等学校

氏名： 谷脇 裕紀

1 個人テーマ：生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばす授業の展開とそれを測る評価問題の研究

2 テーマ設定の理由

観点別評価が導入され、現代の高校教育では知識や技能だけでなく、実際に問題を解決するための思考力・判断力・表現力を生徒達に身に付けさせ、それを評価することが求められている。しかし、授業や考査で扱う問題の「知識・技能」と「思考・判断・表現」の境界線は曖昧で、教員の業務時間をそういった問題作成や分別ばかりに割くことはできない。最近の入試や模試問題でも工夫が凝らされ、思考力・判断力・表現力を問うてはいるものの、本当に思考力が問われているのか、と疑問に思う出題もあり、多くの学校現場で混乱が生じているのではないだろうか。そこで私は、授業で生徒に身に付けさせるべき思考力・判断力・表現力とそれを定期考査等で測るための評価問題の研究を個人テーマとすることにした。

3 研究内容（取組内容）

- ① 共通テスト過去問や外部模試を活用し、近年の入試問題や模試で出題されている問題を研究する。
- ② ①で研究した問題に対応でき、かつ観点別評価の一観点である思考・判断・表現を生徒に身に付けさせる授業やタスクとその力を測る試験問題について研究する。
- ③ 実際に試験問題に②で研究した問題を出題し、そこから得られた結果を考察する。

4 成果

共通テスト・外部模試で出題されている問題について

英語の共通テストは実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定が重視されている。リーディングにおいては様々なテキストから、リスニングにおいては生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取ったり、聞き取ったりする力等を問うことがねらいとなっている。これらのねらいは過去3年分の共通テスト問題から読み取ることができ、最近の外部模試においても、共通テストの問題を意識して出題されたと思われる問いが散見される。上記の出題のねらいや問題を研究する中で、現代の高校生に求められている英語思考力・判断力・表現力を養成するために、私は自身の授業で以下の2つの力を生徒に身に付けさせたいと感じた。

- ① 場面や状況に合わせて、必要なものと必要ではないものに区別し、素早く情報を整理する力。
- ② 表やグラフ、イラスト、講義メモなどのテキスト以外のソースやツールを活用しながら、場面や状況に合ったタスクを遂行する力。

思考力・判断力・表現力を養成し、上記問題に対応するスキルを身に付ける活動や試験問題

生徒が上記の力を身に付けるために今年度授業内で行ったタスクや考査問題の例の一部を以下に示す。

① Not Given を含む正誤問題

以下は Revised LANDMARK English Communication II（啓林館）の Lesson 6 に関するリーディング問題の一例である。正誤問題の選択肢を増やすことで情報識別能力を高められる問いになると考えた。

以下のア～ウの中から上記英文内容と一致するものには T を、一致しないものには F を、本文に記述がないため正誤が判断できないものには NG (= Not Given) を書きなさい。

ア. The Sagrada Familia takes a long time to construct because of lack of funds.

イ. When Gaudi was 31, he was already famous.

ウ. Gaudi developed his artistic abilities by seeing the nature in his childhood.

② グループ分け・情報判別問題

以下は Revised LANDMARK English Communication II (啓林館) の Lesson 4 に関するリーディング問題の一例である。このテキスト中には Gabrielle “Coco” Chanel と Steve Jobs についての記述があり、出題を工夫することで情報判別問題が作成できると考えた。

以下の(1)~(4)について、上記英文とジョブズに一致することにはア、上記英文とシャネルに一致することにはイ、上記英文とジョブズ、シャネルの両者とも一致することにはウ、上記英文とジョブズ、シャネル両者とも関係がないことにはエを書きなさい。

- (1) The person made a speech at a Stanford University graduation ceremony.
- (2) The person was extremely successful through producing what the person liked.
- (3) The person had a huge influence on the world.
- (4) The person always brought a Chanel's handbag anywhere, while listening to music on an iPod.

→上記の①、②のような問題に取り組むことで、与えられた情報を区別したり、複数の情報の比較や一致点を見つけたりする力が身に付くのではないか。

③ グラフィックオーガナイザーを用いたリーディング活動

以下は Revised LANDMARK English Communication II (啓林館) の Lesson 3 に関するリーディング問題の一例である。共通テスト等の出題を参考に、このテキストの講義メモをイメージして作成した。

以下は上記の英文を図式化したものである。英文に基づいて 1~5 の () に当てはまる語を書きなさい。なお、各空欄に入る語は 1 語とは限らず、() に文字が与えられている場合はその文字から始まる語 (句) を書きなさい。

Barry is the most famous among the dogs of the hospice.
He saved (1. _____) people deep in the snowy Alps.

His most famous rescue
He saved a (2. _____) sleeping in a cave.

According to a Swiss animal psychologist, ...
• Barry is the greatest dog.
• He searched the mountain and (3. s _____) people buried under avalanches.

Therefore,
Saint Bernard dogs are seen as (4. _____) by the Swiss people.

→③のような活動により、話者や英文の要点及び概要を理解する力や、テキストの論理展開を視覚的に把握したり、出来事を時系列に整理したりする力が身に付くのではないか。また、グラフィックオーガナイザーを用いてリーディング活動をすることで、英語表現力の伸長を図ることも考えられる。音声聞きながら空欄を埋め、概要を把握するリスニングタスクとしての活用も考えられる。

上記の①~③は「指導と表現の一体化」のための学習評価に関する参考資料に紹介されている思考・判断・表現を評価する問題の要素を含むため、日々の授業の中でこのようなタスクに取り組み、その類似問題を思考・判断・表現を評価する考查問題として出題できる。しかし、知識・技能を評価する問題と比べ、思考・判断・表現を評価する問題は作成に時間がかかり、難易度も高くなる傾向があるため、毎回の考查で知識・技能と思考・判断・表現を評価する問題の割合を 1:1 にすることは教師と生徒の双方から見て非現実的である。そこで思考・判断・表現の評価に重きを置く活動やパフォーマンステストを定期考查とは別に行うことで、考查での配点割合の不均衡を解消することができると考えた。以下にその活動の 2 例を示す。

④ ルーブリック評価表で評価する英作文

問：以下の [situation] を読み、英作文を書きなさい。

[situation] 友人の Sam がオーストラリアから日本にやってきました。連れて行きたい場所とその理由について、以下の条件 a, b に従い、Kaito になったつもりで英語のメールを書きなさい。

・条件 a：①にはあなたが Sam を連れて行きたい場所や観光地名を英語で書きなさい。

・条件 b：②には①に連れて行きたい理由を 40 語程度で 2 つ書きなさい。なお、文の数はいくでもかまわない。

※解答欄の () words には②だけの語数を書くこと。

【ルーブリック評価表】

①の採点基準：どこかしの地名、観光地が書いてあればボーナス点 1 点を与える。(スペルミス等不問)

②の採点基準

	0 点	C (1 点)	B (2 点)	A (3 点)
[ア] 語数	C を満たさない。	②の記述が 20~31 語または 50 語以上。	②の記述が 32~49 語。	
[イ] 文法	C を満たさない。	[ア]で 1 点以上、かつ文法ミスが 4 種類以上。	[ア]で 1 点以上、かつ文法ミス 2 or 3 種類。	[ア]で 2 点以上、かつ文法ミス 1 種類まで。
[ウ] 内容	C を満たさない。	[ア]で 1 点以上、かつ内容に不備があるが 1 つの理由が記述してある。	[ア]で 1 点以上、かつ内容に不備があるが 2 つの理由が記述してある。	[ア]で 2 点以上、かつ採点者 2 人が難なく理解できる 2 つの理由が記述してある。

→このルーブリック評価表の [ア] は主体的に学習に取り組む態度、[イ] は知識・技能、[ウ] は思考・判断・表現の評価を想定している。なお、教師側の負担を減らすべく、事前に ALT に生徒答案の添削を依頼し、文法間違い箇所を朱線を引いてもらった。こうすることで [イ] に関しては朱線の数を数えるだけで評価をすることができ、[ウ] の評価に集中することができる。

⑤ ルーブリック評価表で評価するプレゼンテーション

Task: In lesson 9, you learnt students of Hibarigaoka High School are working hard to promote their local food, *Yoshida no Udon*. Like them, let's introduce and promote your favorite Japanese cuisine or local food of your hometown to the world!! You are expected to give a presentation by showing attractive slides and pictures.

【ルーブリック評価表】

評価の対象となる 4 つのポイント

- [ア] 声の大きさ・発音の明瞭さ（観客にとって聞き取りやすい発表だったか？）
- [イ] PowerPoint のスライドの工夫（観客を楽しませていたか？）
- [ウ] 発表内容（紹介したい食べ物についてよく分かる発表だったか？）
- [エ] 発表態度（観客とのコミュニケーションを意識した発表だったか？）

	[ア] 声・発音	[イ] PowerPoint のスライド	[ウ] 発表内容	[エ] 発表態度
A	・発表中の声は聞き取りやすい大きな声である。 ・発表中の発音は聞き取りやすいはっきりとした発音である。	・写真やイラスト、図などを効果的に用いて観客を楽しませる発表である。	・どんな食べ物を紹介したいかが分かる発表である。 ・材料とその料理の作り方がおおむね分かる発表である。	・ジェスチャーを交えたり、アイコンタクトを取ったりしながら観客を意識した発表である。
B	・発表中の声が小さい、もしくは発音がはっきりしないところがある。	・写真やイラスト、図などを用いた発表である。	・どんな食べ物かがよく分からない、もしくは材料や作り方がよく分からない発表である。	・原稿に目が行きがちだが、観客を意識しようとする姿勢が見られる。
C	・発表中の声が小さく、発音もはっきりしない。	・写真やイラスト、図などをあまり使おうとしておらず、観客を楽しませられていない。	・どんな食べ物かも、材料やその作り方も全く分からない発表である。	・原稿を読み上げるだけでまったく観客を意識していない発表である。

→このルーブリック評価表の [ア] は知識・技能、[ウ] は思考・判断・表現、[イ] と [エ] は主体的に学習に取り組む態度の評価を想定している。例年、共通テストにはテキストをもとにプレゼンテーション用のスライドを作成するという場面設定問題が出題される。実際に授業内でトピックや発表の条件を与えたプレゼンテーションを経験することで、実体験をもとに場面設定問題に取り組むことができるのではないかと。

上記の④、⑤のような評価を行う場合、与えるタスクに条件付けや場面設定をすることを忘れてはいけない。これは学習指導要領において「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、(中略)適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う」ことが思考力・判断力・表現力等の育成の目標として掲げられており、条件や場面設定に適したパフォーマンスができていないかどうかを評価する必要があるからである。また、ルーブリック評価表はパフォーマンステストを行う前に生徒に明示する

必要がある。現行学習指導要領では学習評価の方針を事前に生徒と共有する場面を設けることが求められており、これにより生徒自身が学習の見通しをもち、学習に励んだり、自身の学習の振り返りをしたりすることにつながると想定できる。これらのタスクは定期考査では不十分な評価を補うための活動でもあるため、思考・判断・表現の観点の配点を高くすることも考えられる。

5 課題

今年度、このような取り組み・研究を通して、現代の高校生に求められている思考力とは何かを模索し、自身の授業を現行学習指導要領に合わせてアップデートすることに努めてきた。しかし、その中で以下の2つの課題や矛盾を感じるようになった。

① 必ずしも「共通テストで出題される問題＝思考力・判断力・表現を問う問題」ではない

今回、私は大学進学を目指す多くの高校生が受験する共通テストや模試問題にこそ、思考力・判断力・表現力を問う問題が出題されているものと考え、研究に取り組んだ。確かに、英語の共通テスト問題は実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定が重視されており、出題に工夫が凝らされている。しかし、思考力を用いなくとも、解法のテクニックさえ身に付ければ答えにたどり着くことができる問題も散見される。それ故に、共通テストや模試で高得点を取ることができる＝思考力・判断力・表現力が身に付いている、とは判断できないのではないだろうか。また、共通テストは多くの大学進学希望者が受験するが、全ての学校の全ての高校生が受験するテストではない。本校も普通科・総合学科・ビジネス情報科という3つの学科をもつ高校だが、上述のような評価問題や活動が3学科すべての生徒に適しているとは言い難い。したがって、思考力・判断力・表現力を問う問題のヒントを共通テストや模試問題に求めつつも、目の前の生徒の実態に適し、既習語句や文法項目を用いて、場面や状況に合わせたタスクを遂行する活動や評価問題の提供と研究を続けていくことこそが、我々英語教員が果たすべき使命なのではないだろうか。

② 1年間を見通しての授業計画と活動の精選

生徒が英語思考力・判断力・表現力を発揮するためには、それを支える英単語や文法の知識・技能は必須であり、その知識の定着には時間をかけたい。しかし、限られた時間の中で膨大な知識・技能を生徒に身に付けさせ、その合間を縫うようにアクティビティやパフォーマンステストを行わなければならないのが多くの学校の現状だろう。そんな状況で最大限の成果を上げるためには、やはり1年間の綿密な授業計画と活動の精選が必要である。大まかではあってもいつ、どんな活動を行い、パフォーマンステストはどの時期に何回行うのかという1年間の授業計画と生徒への周知を徹底させたい。

しかし、年に数回のパフォーマンステストだけでは、生徒に十分な表現力を評価するのは困難である。そこで、私は英語外部検定試験の有効活用がその解決策になるのではないかと考える。もちろん、公立高校では外部検定試験の可否やスコアを授業の成績に加味することは難しいが、毎年定期的に実施され、かつ4技能5領域のスキルを1度に測ることができる外部検定試験受験は生徒の表現力を測る機会を増やすことにつながり、生徒の総合的な英語力伸長や学習のモチベーションを高める良いきっかけとなるだろう。受験を強制することはできないが、授業で行う諸活動に加えて、外部検定試験の紹介や受験を奨励することにより、主体的に英語学習に励む生徒を育てていきたい。